驪駒早鬼は女である

「人は女に生まれるのではない、女になるのだ」

―シモーヌ・ド・ボーヴォワール「第二の性」

「……ちょいと出てくる」
「お一人でですかい？　組長（オヤジ）」
「ああ。ちょっとそこまでな」
広壮な勁牙組本家の敷地を守る石造りの門。驪駒早鬼は、衛所に詰めていた若者達を振り返ると、意味ありげに笑みを浮かべた。
「野暮用だ。ついてくんなよ」
「へいっ」
若者達は頭を下げ、霊長園の方向へと消えていく黒々と艶やかな羽を見送る。彼らのような下っ端構成員にとって本家の組長といえば雲上人にも等しい。その意に逆らうことなど及びもつかない。
「……それにしてもよ」
早鬼の姿が人通りの中に見えなくなると、若者の一人が頭を上げた。
「こないだもオヤジ一人でお出かけだったけどよ。どこ行くんだろな。まあ俺らが心配するようなことでもねえけど」
早鬼の言葉に組員が口を挟まないのは、組長という立場によるものではない。勁牙組組長という立場にいられるだけの圧倒的な腕っぷしと行動力そのものに、彼らは信を置いている。先代組長の死をめぐって鬼傑組との間に「鬼牙抗争」と呼ばれる熾烈な戦争があったのはついこの間のことだ。先代を失った勁牙組を率いてその抗争を生き延び、鬼傑との間に手打を成立させたのは驪駒早鬼その人であった。
早鬼が組長の跡目を襲った今、新興勢力である剛欲同盟の伸長や、霊長園の人間から漏れ聞こえる不穏な噂などはあったが、畜生界は一時の平穏を保っていた。
「なんだお前、知らねえのかよ」
早鬼が去っていった方角を見たまま、いぶかしげな顔をしていた若者に相方が笑いかける。
「オヤジ、霊長園に人間霊（サル）のペットを飼ってるって噂だぜ」
「それってよ、まさか……」
「ああ、まさかのまさかだ」

声を潜めて囁く若者に、相方は訳知り顔で頷く。
「折を見ちゃあヒィヒィ言わせてんだとよ、そのサルを」
「そうか、オヤジがなぁ……」
若者は、先ほど上目に見た早鬼の姿態を頭の中に呼び起こす。羽と同じく黒く艶めく絹糸のような髪。すらりと伸びたしなやかな手足。溌剌とした筋肉は今にも爆発しそうに張りつめているが、脚も胸もどこか柔らかく、女らしいまろみを残していた。そしてあどけなさを残した顔に宿る、年相応の稚気を湛えた笑顔。
「オヤジも女だもんなぁ」

「……ばかやろッ……!」
膣の中で予告もなしに放たれる精液の感触に、早鬼は悪態をつく。
「また中で出しやがって……」
まあ、別に孕むわけじゃなし、いいけどよ。早鬼は独り言ち、申し訳なさそうにしている少年から身を離す。口調が荒っぽいのはいつものことだが、声色はどこか柔らかく、子供の不始末を咎める母親のような優しさを孕んでいた。
霊長園の外れ、畜生界の下町とを隔てる濠のほとり。その人間霊の少年が住んでいるのはその一角にある、小屋とも呼べない粗末なあばら家だった。わずかに雨露をしのげるだけの破れた軒と、寝るためのむしろ。それだけだった。
乱雑に身なりを整えると、二人――いや、一匹と一人は、並んでむしろの上に座る。勁牙組組長という激務の合間を縫って、時折早鬼はこの少年の元を訪れていた。気の置けない勁牙組の家中とは言え、早鬼とて若い雌である。ストレスも肉欲も、たまるものはたまる。気晴らしと言えば気晴らし。性欲の発散と言えばそれまでだった。
「……やることやったらもうおねむかよ」
早くも少年は舟をこぎ始めていた。早鬼の知らないところで畜生に小突き回され、わずかな日銭

を稼いでいるのか、あるいはその目を盗んで、霊長園から出るゴミや廃材を漁っているのか。早鬼はこの人間がどのように糊口をシノでいるのか知らなかった。知る気もなかった。名前も知らない。粗末な暮らしをしている人間霊、それだけだ。

「まったく……」

呆れた風に早鬼は肩をすくめ、うつらうつらと頭を揺らす少年を抱き寄せる。早鬼の肩にもたれながら、少年の手は無意識に柔らかな胸をまさぐっていた。畜生霊に子供の人間霊は少ない。幼くして命を落とした人間は、大抵三途の川を渡る手前、賽の河原のあたりにいる。人間の年齢はわからないが、まだ髭も生えないその少年は、まだ母親の胸が恋しい年頃であったのかもしれない。

とんだガキがよ、と早鬼は苦笑する。チンポは一丁前におったててるくせに。

早鬼が少年と出会ったのは、まだ驪駒姓と勁牙組組長を襲名する前、若頭の地位に昇ったばかりの頃だった。

「あァ？　何見てんだよ。見世物じゃねぇぞ」

霊長園の見回りがてら、堀端に立って空を眺めていた早鬼を見つめる視線があった。すすけて粗末な身なりをしたまだ若い、子供と言ってもいい人間霊は、早鬼の顔を知らなかった。ただ、その黒い羽を見て綺麗だと言った。

「綺麗？」

その意味は知らなかったが、自分に似つかわしくない言葉であるとは思っていた。霊長園の売春宿で春をひさぐ人間霊。鬼傑組の成金どもが連れ歩く、けばけばしく着飾った女たち。そういう手合いが言われて相好を崩す言葉、それくらいは知っていた。

いぶかる早鬼に、その少年は綺麗、の意味を説明した。空。星。月。雲。花。手が届かないけれども、美しいもの。触れたいと思うもの。拙い言葉で、そう説明した。どれも畜生界には縁がない

ものじゃないか、と早鬼は嗤った。
「触ってみるか？」
少年は早鬼の黒い翼に触れて、暖かいと言った。人間にしては卑屈さのない、その物おじしない態度が気に入って、早鬼はその年若い人間の肩を叩いた。
「……こいつはどうだ」
早鬼は銃を抜いて、少年に見せた。組長から預かった大事な道具。少年は、それは綺麗ではない、と言った。余りにも冷たすぎる、とも。早鬼は別に怒るでもなく、怒鳴るでもなく、その言葉を素直に受け入れた。その人間霊にはそう見えたのだろう。
最初の馴れ初めは、それで終わった。そのころの早鬼には、別の想い人がいた。

「早鬼よォ、お前ェ……浮いた話の一つもねえのかい？」
「あ？　ねぇよ」
先代勁牙組組長と、その若者頭であった早鬼が二人、本家の奥座敷で話し込んでいた時のことであった。後ろ盾とてなく、孤立無援の女児として畜生界に二度目の生を享けた早鬼に取っては、先代は実の親以上の存在だった。天馬と言えば聞こえはいいが、畜生としてみれば馬でもなければ鳥でもない半端者。早鬼の腕力と胆力を見込んだ先代が勁牙組に拾いあげてくれなければ、どこかの悪場所か見世物小屋で人間霊と並んで搾取され続ける身だった。
「弱いやつは嫌いだ。男でも、女でもな。私より弱いやつに股ァ開くなんざまっぴらごめんだ」
若頭として組長から預かった銃を磨きながら、早鬼はうそぶく。二人で話すときは、先代も早鬼の口さがない態度を咎めることはなかった。ヤクザとしての面目を失い、自ら破門した実の息子に代わって、名実ともに自らの子だと思っていたのかもしれない。事実、先代の口ぶりは年頃の娘を

持った心配性な父親のようでもあった。
「……オヤジぐらい、勁(つよ)いオスだったらいいかもな」
「ほぅ」
冗談めかしてはいたが、早鬼の言葉は本心から出たものであった。外部からはしきたりと年功序列に囚われた古臭いヤクザだとも言われる勁牙組だが、その実は胆力と手腕がものをいう実力組織である。年若い早鬼が先達を飛び越えて若者頭の地位に上ったのがその証拠であり、その早鬼の実力を見抜いたのは先代の度量であった。
早鬼は自らの地位を実力に見合った正当なものとは考えていたが、それでも度量において、また腕力においても、勁牙組の中で敵わない者が一人いると知っていた――先代組長その人である。
「言ったな？」
「え？」
早鬼は銃の手入れをしていた手を止めて、先代の方に視線を向けた。
「…お前ェ、まだわかってねぇな」
先代はすっくと座を立つと、座ったまま目をぱちくりさせる早鬼の前に立った。
「俺らの商売(シノギ)じゃ『冗談でした』は通じねェんだよ」
有無を言わさぬ力強い手が早鬼の顔を持ち上げる。そこで早鬼が見たのは柔和な義理の親の目ではなく、冷徹な畜生ヤクザの目であった。圧倒的な力でねじ伏せ、相手が従うことを疑わない畜生の貌。先代の言う通りであった。親が股を開けと言えば股を開く、ケツを出せと言えばケツを出す。それは畜生渡世の義理である以上に、今ここにある厳然たる力関係であった。
「……ははっ」
早鬼が目を見開いたまま何も言えずにいると、先代破顔一笑、呵々と笑い出した。
「な、何だよ」
「いや、なに」
可笑しくて仕方ないと言わんばかり、目尻に涙

を浮かべながら先代は早鬼の頭をわしゃわしゃと撫でた。
「お前さんが柄にもなくしおらしいこと言いだすから、ついな」
「やめてくれよ……まったく」
口をとがらせながらも早鬼は、まんざらでもなさそうに目を細めて、頭を撫でられるがままに任せていた。
「……なあ、オヤジ」
いつにもなく神妙な面持ちで、早鬼がぽつりと呟く。
「いくら私でも、冗談であんなこたぁ言わねえよ」
「そうかい」
先代は静かに頷き、早鬼の前に屈みこんだ。微かに震える早鬼の手を、男の大きな、節くれだった手が包むように握りしめる。少女が抱いていたのは恋慕だったのか、あるいは畏敬であったか。はたまた、単に若い体の内に持て余した肉欲の疼きであったのか。己のうちにある興奮を感じながら、その正体を見極めるにはまだ早鬼は若く、稚かった。
「試してみるか？　そっちの方はとんとご無沙汰だけどよ、まだ多少はお役に立てるかもしれねェな」
「口説いてんのかよ、そりゃ」
「……そういや、お前さんを口説くのは二度目だったな。一度目は親子の縁の話だったが――」
じっとりと汗のにじんだ早鬼の手のひらを、指の腹が撫でる。
「二度目はこうして男女の話だ。男と女の話に親子の義理を持ちこむほど野暮なつもりはねえよ。お前が決めな、早鬼」
「……やなこった」
額からにじんだ汗が頬を伝う。目の前にいる一人の男から目をそらしてしまいそうになるのをこらえながら、早鬼は精一杯の虚勢を張る。
「らしくねえぜ、オヤジ」
それは一匹の畜生極道としてではなく、一人の

女(メス)としての矜持であった。
「……私もせっかくの新鉢だ。そんなまどろっこしい口説きかたじゃくれてやれねえよ」
「そうだな」
静かに頷くと、先代は早鬼の肩に腕を回した。そのまま抱きすくめられるようにして、早鬼の体は音もなく畳の上に横たえられる。押し倒す、というには余りにも優しく、有無を言わせぬ程には強引に、男の体が上からのしかかる。
「……お前が欲しい。もうどうにもおさまりがつかねえ」
早鬼の頬がほんのりと朱に染まる。強いオスがメスと交尾する。それが畜生の理であった。自分より強い雄のモノになる、その体の内側から湧いてくる、身震いするような興奮。それは早鬼が、初めて己の雌(メス)であることを知った瞬間だった。
はい、と消え入りそうな声が、男の耳に響く。
「決まりだ」
体を離そうとした男を、今度は早鬼の方から背中に腕をまわして引き留める。
「……風呂でも浴びて身ぎれいにしてこようかと思ったが」
「このままでいい」
ふるふる、と畳の上に広がった黒い髪が揺れる。
「そうか」
早鬼の腕に迎えられるようにして、男は女に顔を寄せる。唇と唇がおずおずと重なる。男の刻みと、早鬼の葉巻、互いの吸い付けている煙草の匂いも、もはや雄と雌が漂わせる興奮の匂いを押し隠すことは出来なかった。
「……その……あれだ、オヤジ」
唇が離れると、早鬼は視線を逸らす。
「優しくしてくれる……よな……？」
「約束はできねぇな」
男は冗談めかして肩をすくめる。
「お前があんまりかわいい顔するからな、つい血が上っちまう」
「……よしてくれよ」

「俺は嘘ァ言わねぇよ」
　男の指が触れるたび、早鬼の着衣がはらりとほどけていく。手折られるのを待つ花にも似て、しどけなくさらけ出された豊満な胸をひと撫ですると、男は大口を開けた。
「……よく肉の乗ったいい雌だ」
「んんっ……！」
　こそばゆさに声が漏れる。よく張ってはいるが生堅さを残した乳房を、男は手で支えるように撫でながら、その先端にぷっくりと浮き上がった乳首を舌先で転がす。嘘ばっかりつきやがって。心の中で悪態をつきながら、早鬼はぎゅっと目を閉じて経験したことのない心地よさをこらえる。すべすべとやわらかな肉球に大口を開けて喰らいつき、てのひらでほぐすように転がしながら、敏感な先端を転がす。じらされている、と感じるほどにもどかしいかと思うと、食いちぎられると不安を覚える程に荒々しい。緩急を心得た男の手管に、ただ邪魔くさい肉の塊でしかなかった乳房が性器へと堕ちていく。
「……何だよ……オヤジ……」
　男の舌が乳首を甘噛みするたびに、体の芯がびりびりと震える。歯の根が合わなくなりそうになるのを抑えて、早鬼は強がる。
「そんなに私のお乳、気に入ったのかよ……」
「気に入ったぜ」
　男は上目に早鬼をひとにらみすると、軽く犬歯を乳首に立てた。
「……ッ！」
「張りもいいし丈夫だ。この乳ならいつ孕んでもよさそうだな」
「ま、待ってくれよ……」
　孕む？　そうだ。雄が種をつければ雌は孕む。それが畜生の理。これはそういう営みだ。今更のように思い知ったその心中を知ってか知らずか、男は早鬼の腰を抱くようにして顔を胸から腹の方に寄せていく。丹念に上から下へと舌を這わせ、反応を窺う男の様は繁殖（サカリ）期に達した雌の仕上がり

を検めるようでもあり――肉食獣が食い殺す前に獲物を嬲ってじゃれているようでもあった。
「んぁっ」
へそのすぐ下あたり。肌の舌にうっすらと輪郭を浮かせた、固い筋肉を突き通して、その内側の子壺をじかにくすぐられるような舌遣いに、早鬼は甘い声を漏らす。
「……オヤジよぅ……」
「ん？」
「いっそ……一思いにやってくれよ……」
男が体に触れるたびに、体の芯から熱がじんじんと湧き上がってくる。頭がふわふわして、畳の上に寝かせられているのか舟に揺られているのかも判然としない。
「やなこった」
息も絶え絶えの早鬼は涙をにじませて哀願するが、男は茶目っ気たっぷりに舌を出す。
「こそばゆいのはこっからだぜ」
「ひぅっ」
ざらついた舌が、くすぐるようにスカートから突き出した脚を撫で――男の指が、下着の上から早鬼の柔らかな部分をまさぐる。荒くれたヤクザ者に混じって喧嘩の渡世を生き抜きながらも、その臍下三寸の柔肉だけは鍛えようもなかった。己のうちにある、まだ成熟しきらない雌の部分。自分でも自覚しなかった弱みを、男の手で初めて突きつけられるようでもあった。
「いい具合じゃねえか」
たわいもなく下着ははらりとほどけ、節ばった指がじかに濡れそぼった茂みに触れる。丸餅に一筋切れ目を入れたようなつつましやかな秘裂も、申し訳程度に周りを覆う繊毛も、誰の目にも触れさせたことはない。早鬼とて年相応の興味がないわけでもなく、自分で触れてみたことはある。くすぐったい、以上の感触は持たなかった。しかし秘唇を優しくかき分け、その奥にある肉の芽を転がすようにくじりたてる男の指使いに、勝手に腰が跳ねそうになる。脚を何か生暖かいものが濡ら

していく。失禁した？　違う。もっととろりとして、熱い……。
濡れているのだ、と早鬼は知った。雄のイチモツを受け入れるために。
「怖いか？」
男の指が狭い膣道を掻き分け、未通の証に触れた瞬間、早鬼はぎゅっと身をすくめる。
「……安心しな。大事な新鉢だ、指で傷つけたりやしねぇよ」
「待てってばッ……」
男が股座に顔を近づけようとするのを、早鬼は手で押しとどめる。
「んなとこ舐めたら汚ぇって……」
「あぁ？」
男は慌てる早鬼を不思議そうに一瞥すると、その手を押しのけた。
「可愛い早鬼のおまんこだ。きれいもきたねえもあるかよ」
「んんッ」
男は何の衒いもなく、早鬼の秘唇にむしゃぶりつく。舌が円を描くように狭い膣道を掻き分けるたび、背筋に甘い痺れが走る。男の口淫にされるがまま、早鬼は感じたことのない快楽に身を震わせる。小便を出す場所を親分（オヤ）である男に舐められている、そんなことはすでに意識の埒外だった。腰がおぼつかない。蕩けてなくなってしまったかのようだ。なにか、大きい波のようなものが下腹の内側からせり上がって来る。
「息が出来ねえよ」
早鬼が初めて感じる絶頂に備えて本能的に身をこわばらせた瞬間、男の手がぱんぱんと太腿のあたりを叩いた。
「こっちが先に往生しちまう」
意識せぬうちに両の脚が男の頭をがっちりとらえ、早鬼の方から腰を押し付けていた。
「……ご、ごめん……オヤジ」
「楽にしてな」
絡めた脚から解放された男は、今度はあやすよ

うに優しく早鬼の尻を叩くと、にかっと笑った。
「……深く息をしろ。力の方から勝手に抜けていく」
「ああ……」
　言われたとおりに深く息を吐く。抗争（カチコミ）と同じだ。肩に力の入ったやつから死んでいく。ふっと体からこわばりが抜けていくと、もう不安はなかった。ずる、ずる、ずちゅと、聞えよがしに愛液を啜りたてる音が、耳からではなく骨から伝わる。その響きさえもどこか心地よかった。脳髄が痺れるような興奮と、奇妙に穏やかな安らぎ。ぺたり、と畳の上に身を横たえ、早鬼は男から与えられる肉欲に酔いしれる。
「んぁっ、あっ……あんっ……！」
　もっと読み書きを習っておけばよかった。回らない頭で早鬼は己の怠惰を呪う。女として初めて知る陶酔。それを言葉にして男に伝えようとも、緩んだ口からは呆けたようにただただ甘やかな嬌声が漏れるばかりだ。「イく」「絶頂に達する」「気をやる」そうした概念そのものが早鬼の中には存在しなかった。盛りのついた畜生がただただ腰を振る、それだけの営みだと思っていた。しかし今は、腰のあたりから背筋をさかのぼり、脳天にまで突き通ろうとする熱いざざなみをただただ受け入れるしか出来ない。
「あはっ、んぁっ、あっ、あっあっ……うぐっ……！」
　きゅう、と勝手に尻の穴に力がこもる。しゃっくりでも起こしたかのように、白い腹がふるふると震える。唐突に訪れた法悦を、早鬼はただただ背中を丸めてこらえる。
「……なんだ」
　早鬼が初めて知る絶頂。最初の潮が引いていくのを急がず眺めながら、男は嘯く。
「不感症のケかと心配しちゃいたが、なかなか可愛い声で哭いてくれるじゃねぇか」
「……うるせえよ」
　顔が赤くなったままなのを意識しながら、早鬼

は顔を背ける。和やかに笑う男の顔を、今は正面から見られなかった。
「なにがとんとご無沙汰だよ。この女泣かせが……私もとんだ嘘つきを親に持ったもんだぜ」
「ははっ」
笑って悪態を聞き流しながら、男の掌が早鬼の髪を撫でる。髪の先までおまんこの神経が通ったかのように、触れられただけで歯の根が合わなくなりそうになる。
「お互い畜生同士、サカるに親も子も関係あるめえよ」
まだ頭がぼんやりとしたまま、悦楽の余韻が引ききらない。力の入らない体に鞭を入れるようにして、早鬼は畳の上に身を起こす。
「……出しなよ」
「あァ？」
「その、ちんぽだよ。ちんぽ。今度は……私がしゃぶってやっからよ……その……」
早鬼の視線は、絡げた着物の裾からのぞく男の股座を泳いでいた。肌に皺こそ刻まれているが、畜生界の荒波を身一つでシノいで来たその体はいまだに筋骨隆々としてたくましい。その体躯に負けじと張り合うように、褌の下ははちきれんばかりに盛り上がっている。
「私だけじゃ、その……不公平だから、な……」
「えらく殊勝じゃねえか」
「……何だよ。食いちぎったりしねえからよ。ビビってんのか？」
呵々と笑う男に、早鬼は精一杯の虚勢を張る。声がかすかに震えていた。
「してくれるってんなら有難い話だけどよ」男が褌を緩める。「お前ェさんこそ、怖気づくなよな？」
褌の脇からまろび出たのは、長さだけでも早鬼の顔に及びそうな逸物であった。早鬼は絶句する。早鬼とて悪場所で育った女である。雌雄のまぐわいも、雄の腰にぶら下がっているものも見たことがないわけでもない。しかし眼前のそれは張り裂けんばかりに赤黒く怒張し、まさに剛直としか形

容しようのない迫力を持って少女の前に突きつけられていた。
「……舐めれば、いいんだよな……？」
「ああ。先をちっとばかり濡らしてくれればそれでいい」
　早鬼はうなずき、生々しく脈打つ肉槍におずおずと顔を寄せた。舌先が鈴口に浮いた透明な玉に触れる。塩辛いような、苦いような、形容しがたいぴりりとした刺激。不快ではなかった。ぎこちなく男の剛直に舌を這わせる。肉の塊から伝わってくる熱が、舌を火傷させそうなほどに感じられる。
「上手じゃねえか」
「……んむっ……世辞は……あむっ……いいんだよっ……」
　上目遣いに見てくる頭を、男の手がわしゃわしゃと嬉しそうに撫でる。つたない口技ではあっても、男が心地よさそうに目を細めているのがなぜかうれしかった。
「……お前なあ」
　互いの秘所をまさぐりながら、早鬼は咎めるように口をとがらせる。
「わざとやってんだろ」
　一度や二度なら間違いで済ませられる。スカートの下に潜り込んだ少年の指は、早鬼の秘裂からさらに奥――筋肉のよく張った双臀の谷間にあるすぼまりに触れていた。
「別に触るなってんじゃないが……」
　少年は、熱いものにでも触ったように慌てて手を引っ込める。早鬼はにかっと笑うと、少年の勃起したペニスを握りしめたままその腰を抱き寄せる。
「お預けだ。今はこっちに集中しな」
「……どこ触ってんだよ、オヤジ……！」

「どこってお前ェ、尻の穴だが？」
早鬼を膝の上に抱き、陰裂を剛直で貫きながら、男はうそぶく。
「お前さん、手前ェのどこにどんな穴が開いてるのか知らねえのかよ」
「そうじゃなくってだな……！」
下腹を突き上げる熱い怒張に、息も絶え絶えになりながら早鬼は気丈に口をとがらせる。何度か体を重ねてはいたが、新鉢を割って間もない膣道はまだ生堅い。男の方もそれをわかっていて、ねじこんでしばらくはこうして早鬼の柔肉が魔羅に馴染むのを焦らず待つのが常であった。その間、背中を触ったり頭を撫でたり、早鬼の体に悪戯して無聊を潰すのが玉に瑕であったが。
「んなとこ触ったら汚ぇだろうが！」
「さんざんチンポもマンコもしゃぶりあっといて今更だろうが。それにな、早鬼よ」
男は愉快気に早鬼の尻穴を撫でさする。
「こっちの穴はこっちの穴で楽しめるんだよ」
「っ……！」
男の胸に顔を埋めたまま、早鬼はぎゅっと身を堅くする。男の言う通り。尻の穴をくじられる度に、前の方の穴が勝手にきゅっと男の剛直を締め付ける。体の中に打ち込まれた肉杭の形が否応なく意識されるのを感じると、腹の底からじんわりと熱を帯びてくる。
「なぁ……オヤジよ……」
半ばすすり泣くように、早鬼は声を震わせる。
「まさかそっちに入れたり……しないよな……？」
返事の代わりに、早鬼の秘裂を押し広げる剛直がひときわ熱く膨れ上がる。
「悪ィ。お前が尻の穴に魔羅ァねじ込まれてひんひん言ってるとこ想像しただけでいきり立っちまった」
「馬鹿野郎、この変態っ……！」